



1962年4月6日、熊本県生まれ。八代高から'81年ドラフト外で西武入団。3年連続40本塁打を記録し本塁打王、盗塁王を獲得。走攻守そろった外野手として活躍。'94年ダイエーに移籍し'02年現役引退。'09年ソフトバンク監督に就任すると'10年、'11年とリーグ連覇を果たした

秋

山



**NIPPON
SERIES**
2011

永谷脩=文
text by Osamu Nagatani

Koji Akiyama

幸

寡黙な男の 大いなる決断。

「全7戦、死闘の舞台裏」

就任3年間でチームを着実に強くし、圧倒的な成績を挙げて臨んだ、指揮官として初のシリーズ。短期決戦を制すために必要なものは何か。苦闘の末に栄冠を掴んだ静かなる男の、激動の日々を追った。



第7戦の7回、秋山ボークスの新り込み隊長・川崎が、タメ押しとなる3点目のホームラン

今年7月のオールスター期間中、秋山幸二は、落合博満と食事をとにもする機会があった。その席上、秋山の話を聞いた落合は、こう驚いたという。

「お前、そこまで細かく指示してるのか。オレは、投手のことなんて任せっきり。明日の先発だってわからん時がある」

秋山には「静かな監督」というイメージがつきまとう。本人も「オレは何もしないもの。見ていて、いい選手を使うだけだから。余分なことはしない」と言う。だが、実際には、選手個々を細かく把握し、たとえば中継ぎ投手の起用法についても、普段からコーチに細かい指示を出してきた。

何もしないふり、昼行灯を決め込んで、世間からの風当たりを微妙に避けながら、チームを変えていく。それが、王貞治の後を受けて指揮官の座にのりあがった3年間、秋山がやってきたことだった。

09年の監督就任当時、戦力は磐石ではなかった。王監督時代を支えてきたベテランに力の衰えが目立ち、若手の底上げが必要になっていたのだ。「勝利と育成」という異なる命題を同時に実現しなければいけない過渡期。困難な状況をつきつけられた秋山は、次々とチームの改造に着手していった。

攻撃面では、川崎宗則、本多雄一、松田宣浩ら走れる戦力を重用。有望な若手投手には、自分が現役時代にハングリー精神を養った海外武者修行を経験させた。そして小久保裕紀、松中信彦という2人の功労者も決して特別扱いせず、「この世界で生き残ったかったら、結果を残さない」と見守った。そして1カ月待って成績が悪ければ、容赦なくスタメンから外す。「結果が出てないんだから、仕方ないじゃん」と、平然と語る凄さがあった。移籍組の多村仁志や内川聖一に対しても同じ姿勢で臨み、彼らが故障などで欠場を余儀なくされると、「休みたいなら、いくらでも休んでいい」とばかりに、福田秀平や明石健志ら若手野手を抜擢し、その穴を埋めた。内川

は「自分がいなくても機能するチームに恐ろしさを感じた」という。若手とベテランを区別なく競わすことで活性化を促し、チームは着実にその強さを増してきた。

そして2011年秋。11球団に勝ち越し、2位に17・5ゲームの大差をつけるという圧倒的な成績を挙げ、監督として初めて日本シリーズの舞台に乗り込んできたのである。

「勝って当たり前と言われて勝つというのは、本当にしんどい。これだけ勝ってきたのだから、別に動く必要はない。普段通り戦うだけ」
決戦直前、そう語った秋山は、第1、2戦、そして第6、7戦の先発は、和田毅、杉内俊哉の左腕2本柱で行く、そして打順も普段通りで臨むと、心に決めていた。

ところが、本拠地・福岡でまさかの2連敗を喫する。同点で迎えた延長10回に守護神・馬原孝浩が打たれて1-2で負けるという、同じパターンの敗戦だった。

名古屋に向かう飛行機の中で、秋山の脳裏に浮かんだのは、選手として出場し、ホークスが福岡への本拠地移転後初の日本一に輝いた99年のシリーズだった。王監督はこのシリーズ、主将の秋山を、シーズンの成績が今ひとつだったにもかかわらず、1番打者として起用し続けた。秋山はこれにこたえて2本塁打を放ち、ナゴヤドームのフェンスに駆け上がって打球を好捕するなど奮闘し、チームを牽引。37歳で史上最年長MVPを獲得している。機内でそんな思いを巡らせていた秋山は、ある決断を下した。

「このチームの精神的支柱は、急成長した松田でも、移籍してきた内川でもない。やはり、主将の小久保だ。小久保を4番に据えよう」
そして、移動日のナゴヤドーム。40歳の主将に、こう告げた。

「明日は4番を頼む」

気持ちを高めるためには、試合前日に言っておいたほうがいい。そう考えて行なった、寡黙な男が減多にしない事前通告だった。

一方、2試合連続敗戦投手となった馬原には、こう語りかけた。

「お前を外すことはない。与えられた仕事を頼む」

馬原は今季、秋山と同じく、母親を亡くしている。それだけに、馬原がシリーズにかけ

る思いが特別なことを知っていた。

「開き直って、やるしかない」

そして迎えた第3戦。先発の攝津正から金澤健人、森福允彦と繋ぎ、ファルケンボグが縮めて、待望のシリーズ初勝利を挙げる。

4番に座った小久保も2安打を打ち、存在感を示した。秋山は、裏方たちと勝利の握手をかわしながら、ポツリとつぶやいた。

「勝つことによって、こんなに大変なことなんだ」

選手の意気に応える采配で、敵地・名古屋で3連勝。

1つ勝って吹っ切れた第4戦は、小久保が先制打を放つ活躍を見せ、初回に2得点。先

発・ホルトン、森福、そして今季初めてイニングをまたいで投げたファルケンボグの力投で、連勝を果たす。

続く第5戦、先発した育成枠出身の山田大樹のリリーフとして起用したのは、前々日に

先発し、110球を投げた攝津。「本人が、投げると言ってくれたから」と秋山は説明し

たが、選手の意気に応える采配だった。そして5点差をつけた9回に馬原を投入。敗戦の

ショックを和らげようという「人情采配」も決まり、敵地で3連勝を飾った。

第6戦の決断も早かった。第1戦で好投した和

田を1点ビハインドの5回85球で諦め、金澤へスイッチ。結果的に1-2で敗れてしま

うが、王は「秋山監督の采配は間違っていない」と評価した。

「明日は総力戦、それだけ」と言って臨んだ最終戦。マウンドを託したのは、杉内だった。

「とにかくスムーズに」と、秋山が祈るよう

な思いで見守った立ち上がり、杉内は三者凡退で抑える。そして先制点は3回、川崎の押し出し四球によって生まれた。以前、チャンスで凡退した川崎に、秋山がこう声をかけたことがあった。「自分たちのチャンスに硬くなつて、ピンチにしているよ。相手の方がもっと苦しいんだ」。この言葉を思い出して、粘って選んだ四球だった。

7回無失点の好投を演じた杉内の後を任せ

たファルケンボグが9回に負傷退場すると、森福から、最後は攝津で締めくくった。意気

に感じて投げる一番調子のいい投手を起用し、3-0での逃げ切り。苦しみつつ、見事、日本一を勝ち取ったのだ。そしてMVPは、第

3戦から4番に起用し、自身の最年長記録を更新する40歳の小久保が獲得した。

秋山は、日本一のチームをこう賞賛する。

「長いシーズンを戦い抜いて、どこに出しても恥ずかしくないチームになった。苦しい中、少ないチャンスをモノにできたのが勝因です」

8度舞った胴上げ。リーグ2連覇のときも、クライマックスシリーズ制覇のときも決して泣かなかつた秋山の目に、大粒の涙があつた。

周囲の期待が大きく、「勝つて当たり前」といわれたチームの指揮を執る難しさ。万感の

思いが湧く、いつもと違う涙であつた。そして、しみじみ「疲れた」と漏らした。

99年の日本一の時、当時の王監督に「4

月に亡くなった根本陸夫球団社長が生きていたら、何と声をかけてくれたでしょうか」と

訊ねたことがある。返ってきた答えは、「よくぞ、ボロチームをここまでにしてくれたね、

と言ってくれると思うよ」だった。

そしていま、王に「秋山監督に声をかけるとしたら」と聞いた。すると王はこう言った。

「よくぞ、ここまで強いチームに仕上げてくれた。大したものだ」

寡黙にして鈍重、動かない男……。そう呼ばれてきた指揮官が、決戦の舞台上で存分に動き、その真価を証明した。

Koji Akiyama

Hideki Sugiyama

